

(資料 14)

平成 17 年度 厚生労働科学研究費補助金 (医療技術総合研究事業)
患者／家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究
(主任研究者：緒方裕光)

分担研究報告書

6. 公共図書館における消費者健康情報サービスに関する調査研究

分担研究者 杉江典子 (駿河台大学文化情報学部)
分担研究者 野添篤毅 (愛知淑徳大学文学部)

本研究班では、患者/家族（一般人）が必要とする保健医療情報に関する現状把握、情報評価手法の検討、信頼性の高い情報源構築を大きな目標としている。今年度本研究では、一般の人々が健康分野においてどのような情報ニーズを持っており、どのような情報源を利用してそのニーズを満たしているか、さらには一般の人々への情報提供を使命とする公共図書館ではどのようにしてサービスを提供しているのかを把握することを目指し、以下の3つの調査・研究を行った。

まず、情報ニーズが高いと言われている、病院情報を探すための二次資料の傾向および内容分析を行い（Ⅰ）、次に一般人がアクセスしやすい情報源としてウェブ上で公開されている質問回答事例データベースにおける健康分野の質問分析を行った（Ⅱ）。さらに、一般人に対する情報提供を担う公共図書館における健康情報サービスに関する実地調査を行った（Ⅲ）。

Ⅰ. 病院情報を探すための二次資料の傾向と病院ランキング本の評価

1. 研究の背景

市民が自分や家族の健康を守るためには、より主体的に積極的に自らの健康や医療にかかわることが重要である。主体的に積極的に健康や医療にかかわるということは、病気の治療や健康の維持のために必要な情報を自分で入手し、それらを元に考え意思決定を行い、行動するということであり、このような姿勢は社会に浸透しつつある。医療や健康に対するこのような姿勢が社会に浸透するにつれ、医療や健康に対する情報ニーズは当然のことながら高まり、この分野の情報が種々のメデ

ィアから大量に発信されるようになってきた。近年の医療や健康に対する情報ニーズの高さは、各種の世論調査などからも明らかである。医療や健康に関する情報と言っても幅広いが、中でもニーズの高さが顕著なのは、医療機関に対する情報ニーズである。このことは、いくつかの世論調査の結果からうかがうことができる。

一般市民を対象にした医療や健康に関する世論調査は、各地の自治体で数多く行われてきている。例えば、2001年に多摩市に住む20歳以上の市民1,500人を対象として実施された「多摩市政世論調査」には、「健康に関する知識や情報として、どのようなことを知

りたいですか。」という質問がある。この問いへの回答では、回答者の多い順に、53.3%が「休日・夜間や救急時の医療機関について」、41.5%が「病院・医療などの医療機関について」、33.8%が「薬の効用や副作用について」、22.3%が「病気や怪我の応急手当や方法について」、12.9%が「食生活や健康について」を選んでいる¹。

あるいは、2001年に20歳以上の東京都民3,000人を対象として実施された「保健医療に関する世論調査」では、保健や医療に関する情報は足りているかという問いに対して、あまり足りていない、あるいは足りていないと回答した回答者は合計52.6%であった。さらに、足りていない情報の内容をたずねる問いへの回答は、回答者の多い順に、「どこにどのような医療機関があるかについての情報」が45.2%、「病気の症状や予防・治療に関する情報」が39.3%、「休日・夜間・救急医療機関に関する情報」が34.3%、「薬の効能、副作用や服用方法等についての情報」が34.3%、「がんなど特定の病気の専門医療機関や医師に関する情報」が21.7%などとなっている²。

このような状況を反映してか、病院情報を

探すために参考になる図書や雑誌記事の出版点数は年々増加する傾向にある。例えば、病院情報を探すための図書の出版点数をいくつかの書誌類によって調べてみたところ、1990年代以降増加していることが明らかになった（詳しくは4章2節で取り上げる）。

あるいは、近年出版が目につく病院ランキングに関する雑誌記事の過去20年間の出版点数を調べてみたところ、雑誌記事は1993年に最初に登場し、2002年に急激に増加し、この数年では減少してきているが毎年何点かは出版され続けていることがわかる（図1）。2002年と2003年は、「週刊朝日」が「いい病院ランキング」の特集記事を繰り返し掲載しているため、特に出版点数が多くなっている。雑誌記事の出版点数は、データベース「雑誌記事索引」（日外アソシエーツのMAGAZINEPLUS）を用い、出版年を「1986-2005」、キーワードを「病院 or 医院 or 医療機関」and「ランキング」で検索し、検索結果の書誌情報を目で確認し、該当する文献を数えた。これらの中には、病院ランキングそのものが掲載されている記事と、「病院ランキング本」の現状や問題点について述べた記事とが含まれる。

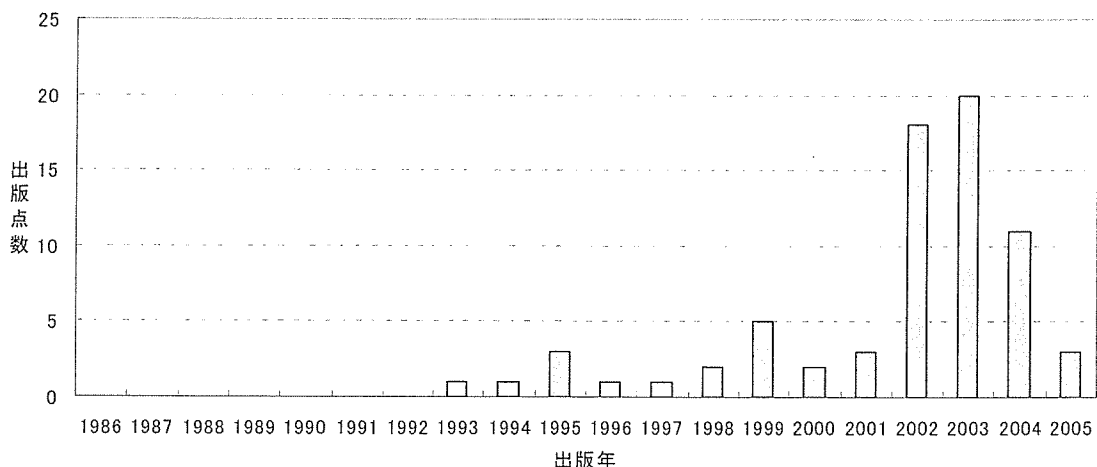


図1 病院ランキングに関する雑誌記事の出版点数の経年変化

2. 目的

医療機関に対する情報ニーズの高まりとともに、病院情報を探するための情報源は近年増加している。しかし、一般の人々の求めるような情報を掲載しており、なおかつ定評のある情報源は多くは存在しない。一般の人々の情報ニーズに応えるために、様々な分野の情報源を収集し提供してきた公共図書館においても、この分野のサービスに対して積極的に取り組んできたとは言えない状況にある。

そこで本研究では、一般の人々が病院情報を探するための二次資料としてどのようなものが、どの程度出版されているのか、どのような傾向を持っているのかを量的に把握すること、そしてそのうち近年特に出版が目立っている「病院ランキング本」の評価を行うことを目的とする。さらに今回の評価を通じて、この分野の二次資料の評価方法を検討するための材料を得ることを目指している。

ここで言う二次資料とは、オリジナルの情報を掲載する一次資料に対して、それらを編

集、加工することによって作成された資料であり、調べるための情報源のことを指している。よって、「病院情報を探するための二次資料」とは、一般の人々が病院を選ぶための情報を得るための情報源であり、病院を探するために必要なデータが主体となって掲載され、項目が一定の順序で排列され、検索が可能になっている資料である。「病院ランキング本」とは、ここでは「病院を探するための二次資料」のうち、病院に何らかのランク付けをし、ランク順に病院に関する各種の情報を掲載している資料を指すこととする。

3. 調査方法

上記の目的を達成するために、本研究では二段階の調査を行った(図2参照)。第一段階では、一般の人々が病院情報を探するための二次資料を、書誌類を使用して収集し、いくつかの観点からその傾向を明らかにした。調査対象の刊行年の範囲は、経年変化を見るために必要な期間を想定して過去20年間とした。

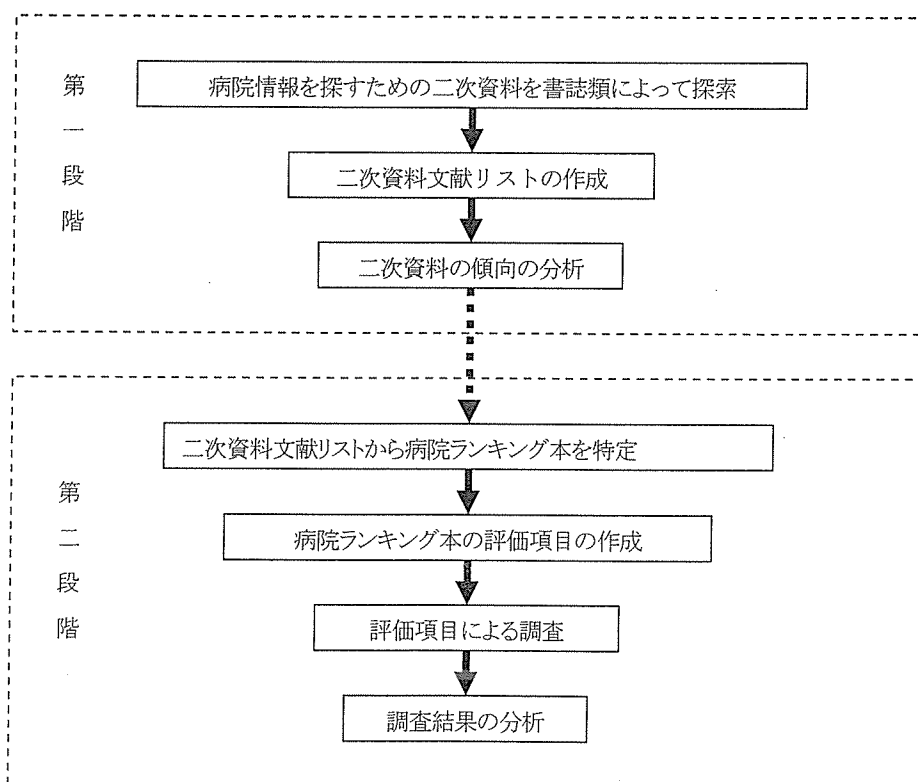


図2 調査の手順フローチャート

第二段階では、第一段階で得られた二次資料のうち、過去 5 年間に出版された病院ランキング本の現物を入手し、いくつかの評価項目に沿って調査し、内容の比較、評価を行った。使用した評価項目は、レファレンスブックの教科書を中心としていくつかの文献を参考にし、調査目的に合致するように作成した。今回は、この分野の二次資料を評価するための方法を検討するための第一歩でもあるため、ある程度のまとまった数が見込め、また評価基準に関する文献が得やすい冊子体のみを対象にした。

4. 病院情報を探すための二次資料の傾向

4.1 書誌による二次資料の収集

過去 20 年間にわが国で出版された、病院情報を探すための二次資料を、書誌類を使用して収集した。文献を収集するために、以下の書誌と目録計 3 点を使用した。文献探索を行ったのは、2005 年 12 月から 2006 年 1 月である。

- 1) 『出版年鑑』(出版ニュース社, 1961~, 年刊)
- 2) 「NDL-OPAC」(国立国会図書館)
- 3) 「BOOKPLUS」(日外アソシエーツ)

文献を特定するための中心的な材料としたのは、『出版年鑑』である。『出版年鑑』は、前年に出版され日本国内で販売された新刊図書の書誌情報を掲載する販売書誌である。『出版年鑑』は、書誌情報が NDC(日本十進分類法)順

に配列されているので、このうちの「498. 16(医療施設)」の欄に掲載されている図書の書誌情報を取り出し、タイトルから判断して該当すると考えられる文献を抽出した。

『出版年鑑』は、調査時点では 2005 年版が最新版であり、2005 年に出版された図書の書誌情報は得られない。そこで 2005 年出版分は、国立国会図書館の OPAC である「NDL-OPAC」によって検索し、タイトルから判断して該当すると考えられる図書を抽出した。「NDL-OPAC」では、分類記号を「498. 16」、タイトルを「病院」、出版年を「2005」として検索した。さらに、『出版年鑑』による漏れを防ぐため、あるいは図書の内容が本研究の収集対象にあたるかどうかを確認するためにも、「NDL-OPAC」と日外アソシエーツによる国内出版物の販売書誌データベースである「BOOKPLUS」を使用した。「BOOKPLUS」は、書誌情報データベースであるが内容情報が充実しているため、内容を判断するために主に用いた。以上のプロセスを経て、「過去 20 年間に出版された、病院情報を探すための二次資料文献リスト」を作成した(付録1)。

4.2 様々な観点からみた二次資料の傾向

「過去 20 年間に出版された、病院情報を探すための二次資料文献リスト」として収集された文献を、年ごとの出版点数、出版者、二次資料の種類という観点から分析した。

まずその出版点数の経年変化を図 3 にまとめ

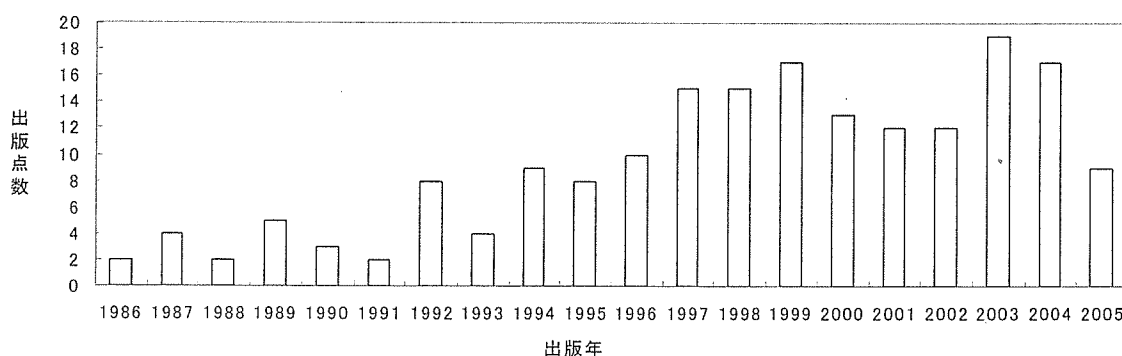


図3 病院情報を探すための二次資料の出版点数の経年変化

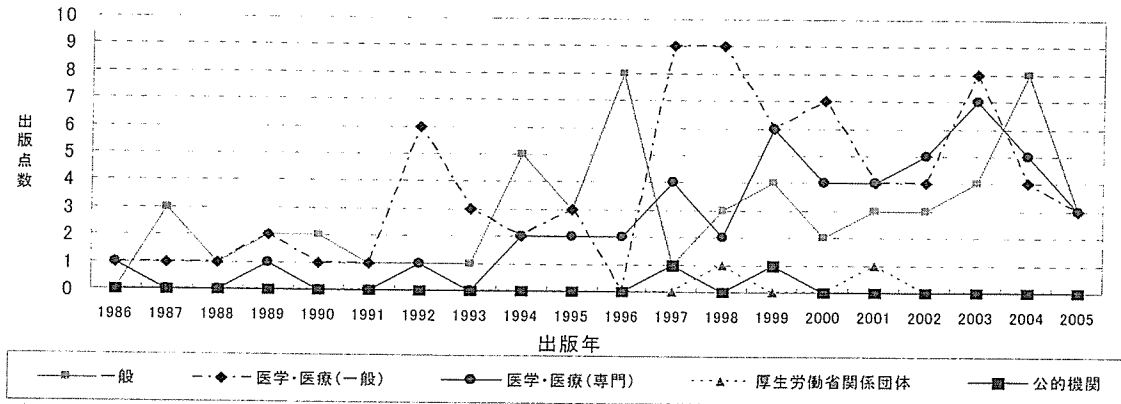


図4 出版者の種類からみた出版点数の経年変化

た。出版点数は1990年代以降出版点数は徐々に増加していると言えるだろう。年ごとの出版点数の増減も目につくが、これは同じ出版社によるシリーズものの図書が数年の間に多数出版されることがあり、その影響を受けている部分が多い。例えば、1997年から2000年頃にかけては、グレイゼ社から関東地方を中心とした地域別の病院ガイドブックが多数出版されている。あるいは2003年、2004年には、医事日報社から地域別の病院名鑑が多数出版されている。

次に、出版者を便宜上5つの種類に分類し、それぞれの出版年ごとの出版点数をまとめたのが図4である。「一般」とは特に専門主題を持たない出版者を、「医学・医療(一般)」とは一般人向けに医学・医療分野の図書を主に出版する出版者を、「医学・医療(専門)」

とは医師や看護師などの専門職向けの医学専門書を主に出版する出版者を、「厚生労働省関係団体」とは厚生労働省の外郭団体と考えられる機関などを、「公的機関」とは地方自治体などの出版者を指している。

あまり顕著な傾向は見られないが、公的機関、厚生労働省関係団体による出版点数よりも、商業出版社による出版が多いこと、「医学・医療(一般)」という医学を特に専門としない出版社による出版点数が1990年代以降高い割合を占めるようになってきていることなどが読み取れる。

さらに、病院情報を探するための二次資料の種類を3つに分類し、それぞれの出版年ごとの出版点数を図5にまとめた。二次資料の種類は、評価の加えられている程度によって便宜上「名

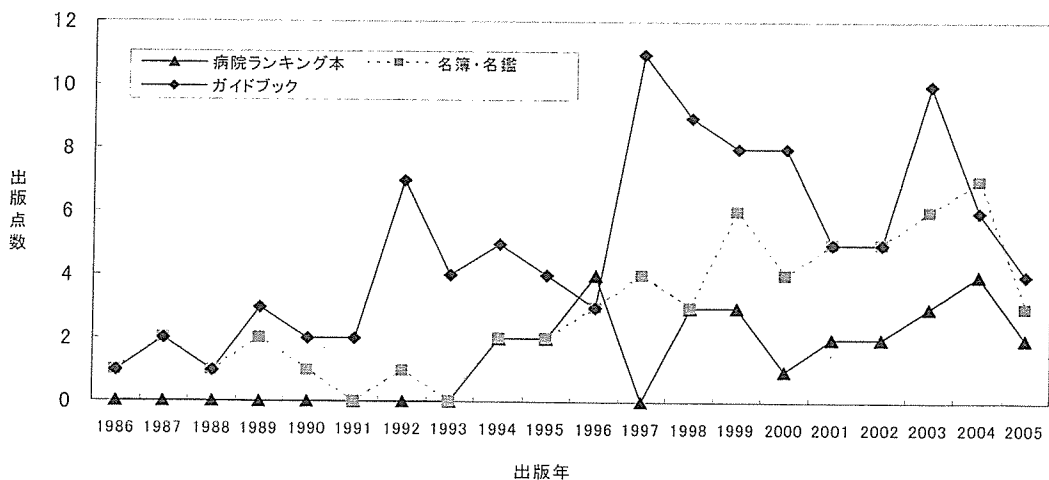


図5 二次資料の種類からみた出版点数の経年変化

簿・名鑑」,「ガイドブック」,「病院ランキング」の3つに分類した。「名簿・名鑑」とは病院の所在地や概要を中心とした情報が掲載され,病院の選択や記述内容に評価がほとんど加えられていないと判断できる情報源,「ガイドブック」とは,所在地や概要以外にも,どのような施設があるか,どのような特徴があるかなどが記載され,病院の選択や記述内容にある程度の評価が加えられていると判断できる情報源,「病院ランキング」とはランク付けされた病院の情報が中心となっており,病院の選択や記述内容が編著者の評価によっていると判断できる情報源とした。

いずれの種類二次資料も年ごとの増減はあるが,1990年代以降はそれ以前に比べると増加している。増減があるのは,図3で述べたのと同様に,同じ出版者によるシリーズものの図書は短い期間に立て続けに何冊も出版されることがあるためである。しかし2004年頃からいずれの種類二次資料も減少に転じている。1990年代後半から2000年代前半にかけてかなりの勢いで様々な出版者から同様の図書や雑誌記事が出版されたため,目新しさがなくなったせいかもしれない。病院ランキング本は,1993年までは1冊も出版されていなかったが,1994年に

最初に出現し,それ以降1997年を除いて毎年出版されるようになっている。

5. 病院ランキング本の評価

4章で作成した「過去20年間に出版された,病院情報を探するための二次資料文献リスト」から,病院ランキング本を抽出した。抽出に際しては,文献リストのうちタイトルから病院ランキング本であることが判断できるものは判断し,できないものは図書の内容情報も含む書誌情報のデータベースである「BOOKPLUS」などによって内容を確認し判断した。病院ランキング本の出版点数の経年変化を改めて図6にまとめた。前節でも見てきたように,病院ランキング本は1994年に最初に出現し,それ以降ほぼ毎年のように出版されるようになっている。

これらの病院ランキング本についてその内容を詳しく評価した。評価対象は,評価に適当な分量となるよう考慮し,過去5年間に出版された二次資料のうち全国あるいは関東地方の病院を対象としてランキングを行っている二次資料であって,調査時点(2006年1月)において入手可能であった図書は6点とした。

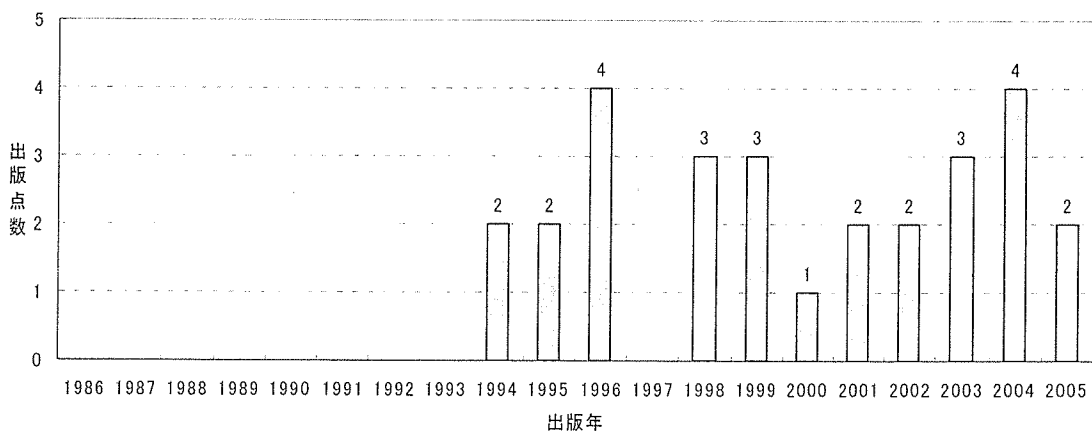


図6 病院ランキング本の出版点数の経年変化

5.1 評価基準

冊子体の二次資料，すなわちレファレンスブックの評価基準を扱った文献として最も基本的なものは，司書課程の学生を対象に作成されたレファレンスサービスの教科書である。これらの評価基準は，過去の研究成果を踏まえ，実務上の利用を経て，広く図書館でも受け入れられているものと考えられ，いくつかの主要な教科書を確認したところ評価基準には大きな違いはなかった。そこでこれらの教科書のうち，評価項目の整理方法やそれぞれの項目の説明が明確であり，実際の作業に向くと考えられる，長澤の「レファレンスブック評価の着眼点³⁾」をもとに，今回の調査目的に合致するよう評価項目を設定した(文献中の該当部分を付録2「長澤によるレファレンスブック評価の着眼点」にまとめた)。

教科書中の評価基準は，レファレンスブックの種類や分野を特化せず，あらゆる種類の資料，分野に対応できるように作成されている。またあくまでも図書館がレファレンスブックの購入を検討するための基準である。よって，今回の調査目的に合致するよう，評価項目の補足，削除を行い，本調査用の「本研究における病院ランキング本の評価項目」(表1)を設定した。

5.2 評価結果

本節では，前節で作成した調査項目に沿って，病院ランキング本の評価を行った。個々の病院ランキング本の詳細な評価結果は，資料「個々の病院ランキング本の評価表」にまとめた。

5.2.1 製作に関わる要素

評価対象とした6点の図書の書名とその製作に関わる要素を表2にまとめた。それぞれの図書の本文中での略称を一番上の行に挙げた。レファレンスブックの編著者や出版者の経歴，過去の著作などは，そのレファレンスブックの権威を判断する手がかりである。特に，医学や医療という専門性の高い分野の場合，情報の信憑性を推し量る重要な要素である。今

回調査対象とした6点の図書の出版者は，いずれも商業出版者で，新聞や雑誌の出版者，あるいは一般図書の出版者であり，医学，医療関係を専門とする出版者ではない。編著者は，それぞれの出版者に作られた編集チームか，個人のジャーナリストで占められており，医学，医療の専門家ではない。

レファレンスブックにとって改訂が行われているということは，そのレファレンスブックが長く出版され続け，繰り返し内容を改められてきていることを意味している。今回調査対象とした6点は，いずれも初版であり，版を改めているものは無かった。朝日と宝島は，雑誌の別冊であるため，当然のことながら版表示はない。今回は過去5年間に出版された病院ランキング本を調査対象としたが，調査時に入手可能であったのは2005年に刊行されたものが1点，2004年に刊行されたものが4点，2003年に刊行されたものが1点であった。比較的早く絶版になり，改訂版が出版されるほどの支持は得ていないといえる。また価格から見ても，安価であり，手軽な読みものとして製作されていることが推測される。

病院ランキング本を製作するためには，調査対象とする病院を選んだり，ランキングとともに掲載する各病院の情報を得たりするために，なにがしかの既存の文献が利用されているはずである。しかし今回の調査対象において，参考とした文献を明確に示しているものはまったくなかった。

5.2.2 内容に関わる要素

評価対象とした6点の図書の内容に関わる要素の評価結果を以下にまとめる。

a. 主題の範囲

内容に関わる要素のうち，主題の範囲を表3にまとめた。扶桑では，3段階の調査を行っているため，調査の順番に①，②，③とわけて記載した。

病院ランキングの対象とされている病院の範囲は，「対象とする施設の種類」にまとめ

表1 本研究における病院ランキング本の評価項目(2006.1 杉江作成)

1. 製作に関わる要素

- a. 編著者
- b. 出版者
- c. 出版年
- d. 改訂の回数
- e. 価格
- f. 電子形態の有無
- g. 参考文献の有無

2. 内容に関わる要素

a. 主題の範囲

- ・対象とする病院の種類
- ・対象病院数
- ・対象診療科数あるいは疾患数
- ・対象地域(都道府県)

b. 調査概要

- ・調査手法
- ・質問紙等の有無
- ・調査対象
- ・調査対象数(のべ)
- ・有効回答数(のべ)
- ・回収率
- ・調査時
- ・調査方法の詳細

c. ランキングの材料

- ・ランキングの材料となった調査項目概略
- ・ランキングの材料となった調査内容(医師・医療そのもの, 施設全般, その他サービス, 管理運営)
- ・ランキングの判断材料
- ・点数化の方法

d. ランキング部分の記載内容

- ・ターゲット
- ・排列方法
- ・ランキング掲載数(のべ)
- ・項目(病院)ごとの掲載内容

e. ランキング部分の検索手段

表2 製作に関わる要素

	朝日	オリコン	宝島	日経新聞	日経BP	扶桑
書名	手術数でわかるいい病院全国ランキング2004: トップ病院の名医たち(週刊朝日臨時増刊)	患者9万人アンケート 完全保存版 患者が決めた! いい病院	最新全国病院<実力度>ランキング(別冊宝島1175号)	日経病院ランキング	医師1万5000人に聞いた全国優良病院ランキング	「患者力」で選ぶいい病院
編著者	朝日新聞社編集	オリコンメディカル編集	渡辺千鶴(ジャーナリスト), 隅恵子(ジャーナリスト)	日本経済新聞社編集	日経メディカル編集	伊藤隼也(ジャーナリスト, カメラマン)著
出版者	朝日新聞社	オリコンメディカル	宝島社	日本経済新聞社	日経BP社	扶桑社
出版年	2004	2003	2005	2004	2004	2004
改訂の回数	版表示無	無	版表示無	無	無	無
税込み価格	480	1575	1575	1260	1260	1500
電子版の有無	無	一部有	無	無	無	無
参考文献の有無	無	無	無	無	無	無

表3 主題の範囲

	朝日	オリコン	宝島	日経新聞	日経BP	扶桑
対象とする施設の種類	病院のみ*	病院, 診療所	病院のみ*	ベッド数200以上の病院	病院のみ*	①②③とも病院のみ*
対象病院数(のべ)	約450	1,502	7,600	2,504	3,465	①500 ②270 ③おそらく50
対象診療科あるいは疾患数	9(疾患)	25(診療科)	10(疾患)	関係なし	12(疾患)	①②③とも関係なし
対象地域(都道府県)	全国	東京, 神奈川, 埼玉, 千葉	全国	全国	全国	①②③とも全国

* 診療所が含まれるかどうかについての記述がない(医療法では入院用ベッド数が20以上あるものを病院といい、19以下のものを診療所としている)。

たように、比較的規模の大きな病院のようである。「対象病院数」は、450 から 7, 600 と幅がある。平成 17 年度版の「厚生統計要覧」によると、わが国の「一般病院数」は、7, 999 とされている⁴ことから、ランキングの対象とされているのは全体の約 5% から 95% ということになり、大きな幅がある。ただし対象病院数はのべ数であるため、実際にはもっと低い割合になるはずである。「対象診療科あるいは疾患数」は疾患では 9 から 12 疾患、診療科では 25 診療科となっていた。

b. 調査の概略

いずれの病院ランキング本でも、ランキングを決定するための調査を行っている。ここでは、それぞれのランキング本で行われている調査の概略を取り上げている(表 4 参照)。

「調査手法」は、すべての調査において質問紙調査であった。調査がどのような手段で行われたかが明記されたものは丸括弧内に記

載した。調査手法はいずれのランキング本でも詳しくは示されていない。例えば、郵送などの場合、質問紙は誰宛に送ったのか、謝礼などは用意されていたのか、質問紙はどのようなものであったかなどがわかる記載はほとんどみつからなかった。質問紙自体を読めるような形で掲載していたのは、日経新聞のみであった。他のランキング本では、項目をまとめたり、概略のみを示しているものもあった。

「調査対象」とされたのは、病院が 4 件、患者が 1 件、開業医が 1 件であった。開業医を調査対象とした日経 BP では、雑誌「日経メディカル」の読者から全国の開業医を抽出したとされている。朝日では、厚生労働省が 2002 年に診療報酬の改定で示した年間手術数の基準値を満たした病院を対象に調査を行っているという。その他の調査では、調査対象をどのような基準で選択したのか、またな

表4 調査の概略

	朝日	オリコン	宝島	日経新聞	日経BP	扶桑
調査手法	質問紙調査	質問紙調査(インターネット)	質問紙調査(郵送)	質問紙調査	質問紙調査(郵送)	①質問紙調査 ②質問紙調査 ③電話による「抜き打ち調査」
質問紙等の有無	無	無	無	有	無	無
調査対象	病院	18歳以上の患者(インターネットモニター)	病院	病院(ベッド数200以上)	開業医	病院
調査対象数(のべ)	不明	9万人	7,600施設	7,860施設	15,221人	500施設
有効回答数(のべ)	不明	6万5424件	1778件	2504件	3,465件	270件
回収率	75.5~87.5%	72.70%	17.5~27.3%	31.80%	22.80%	①54% ②③不明
調査時	おそらく2003年前半	2003.2-6	2004.7-2005.5	2003.5-2001.2	2004.6.7-7.5	①2002.1-7 ②2003.5-8 ③2004.1

表5 ランキングの材料

		朝日	オリコン	宝島	日経新聞	日経BP	扶桑
ランキングの材料となった調査内容概略		9項目(疾患)それぞれの手術数	医療全般、医師の技術や医療水準、医師の説明の丁寧さ・理解しやすさ、スタッフの明るさ・親切さ、設備の清潔さ・使いやすさ、交通の便の良さ等	疾患ごとの症例数と診療体制	①診療成績、医療事故等、②医療事故の防止策等、③質を確保するための体制、④経営・財政面の管理、人材の確保・育成策等	12の病気に対して医師が推薦する病院	アクセス、外来の受付・待合の対応、病室・病院内の環境、食、診療、病院内での連携、患者さんとのコミュニケーション、院内感染への対応等
主なランキングの材料になった調査内容	医師・医療	○	○	◎	◎	△	△
	施設全般	×	○	○	×	×	○
	その他サービス	×	○	△	○	×	◎
	管理運営	×	×	×	◎	×	○
ランキングの判断材料		各病院の自己評価(手術件数)	患者の満足度	各病院の自己評価	各病院の自己評価	開業医の意見	各病院の自己評価

ぜその対象を選択したのかが明確にされていない。

質問紙の「回収率」は、ランキング本によっては、テーマや診療科にわけて集計しているため、複数の回収率が得られているものもあるが、17.5%から87.5%の間であった。宝島、日経新聞、日経BPでは、回収率が4割にも満たないことがわかった。

c. ランキングの材料

いずれの病院ランキング本でも、ランキングを決定するための調査を行っている。この評価項目では、それぞれのランキング本で順

位を決めるための材料とされた主題が何であったかを調べている(表5)。「主なランキングの材料となった調査内容」の4つの分類は、それぞれの調査で取り上げられている主題を整理し、分類したものである。

「医療・医師」とは、ランキングの材料とされた調査の内容にその病院の医師や医療に関する問い(主に病気に対する治療法に関する問い)が含まれているもの、「施設全般」とは、病院内の治療に直接関わる設備だけでなく、待合室やトイレのような設備に関するもの、「その他のサービス」とは、病気の治療に直接は関わらない、患者に対するスタッフの

接遇やアメニティ、病院までのアクセスなどに関するもの、「管理運営」とは、病院の経営や財政面の諸問題、人材などに関するものとした。

主題ごとの欄に記入された「◎」、「○」、「△」、「×」は、それぞれの病院ランキング本で各主題がどの程度調査されているかを示している。「◎」とはその主題が十分に調査されていると判断できたもの、「○」はその主題が十分には言えないまでも調査されていると判断したもの、「△」はその主題が調査されているかどうかの判断が難しいもの、「×」はその主題が調査されていないと判断したものを指している。

例えば日経BPの調査は、開業医に対して病気ごとに推薦する病院を尋ねるというものであった。推薦する病院を問うということは、医療についての直接的な質問をしていることにはならない。しかし回答する医師は、他の病院の医師や医療を見て判断をしているであろうから、「医師・医療」には「△」をつけている。あるいは宝島では、細かな疾患ごとの症例数や診療体制を尋ねる質問を行っている。これらは、医療に関する直接であると判断し、「医師・医療」には「◎」をつけた。

この表から読み取れるように、ランキングを決めるために調べられた主題は、医師や医

療を中心としたものから、その他のサービスを中心としたもの、あるいはオリコンのように様々な主題を取り込んだものまでかなりのばらつきがある。

それぞれのランキング本では、表に示すような主題について調査が行われ、その結果が調査者の決めた点数化の方法によって集計され、ランキング順位が決定されている。このランキングのための点数化の方法（どの調査項目に対してどのような回答であれば何点が加算されるのか）は、朝日、オリコン、宝島では示されているが、日経新聞、扶桑では明確にはされていない。また、点数化の根拠（全体に占める、ある質問の点数の比率をどうするかなど）が述べられているものはなかった。

「ランキングの判断材料」は、調査対象とほぼ同じであるが、順位づけが誰の判断を材料に行われたかを示している。病院の自己評価を元にしてしているものが4件で最も多く、オリコンの患者の満足度と、日経BPの開業医の意見が1件ずつであった。

d. 記載内容

表6では、病院ランキング本における記載内容についてまとめている。まずターゲットとしている読者は、表現などからすべて一般人であると判断できた。排列方法とは、ラン

表6 記載内容

ターゲット	朝日 一般人	オリコン 一般人	宝島 一般人	日経新聞 一般人	日経BP 一般人	扶桑 一般人
排列方法	疾患－ラン キング順	診療科－ラン キング順	疾患－ラン キング順	調査の別－ ランキング順	疾患－都道 府県順－ラン キング順	主題－ラン キング順
ランキング掲載数(のべ)	1,448	1,403	470	800	約3,024	703
項目(病院)ごと の記載内容	ランキング順位	○	○	○	○	○
	得点にあたるもの	○	○	○	○	○
	病院名	○	○	○	○	○
	住所	△*1	○	○	×	×
	電話番号	×	○	○	×	×
	診察時間	×	○	○	×	×
	交通手段	○	×	×	×	×
	病院HPのURL		○	×	×	×
代表的な医師名	○	△*2	○	×	×	×

・○、×は有無を表す。

*1住所は市区町村までの記載となっている。

*2載っている病院もあれば、載っていない病院もある。

キングをどのような分類、順序で記載しているかを表している。朝日、オリコン、宝島、日経BPでは、疾患あるいは診療科ごとにわけてその中でランキング順に病院名やその他の情報を記載している。日経新聞では、「患者にやさしい病院」、「安全重視の病院」、「医療の質を重視している病院」、「経営が充実している病院」という4つの主題別の調査を行っており、それぞれの調査ごとにわけてランキングを掲載している。扶桑では、調査結果を「アクセス力」、「患者サービス力」、「アメニティ力」、「マンパワー力」、「入院食満足力」、「緊急対策力」、「院内感染対応力」、「情報公開力」、「医療事故対応力」、「組織対応力」、「総合ランキングベスト100」という11項目にわけて集計し、ランキングを掲載している。

ランキングの個々の項目には、ランキングの順位以外に、病院名、得点、住所なども記載されている。「項目（病院）ごとの記載内容」では、項目として挙げた内容が、それぞれのランキング本で記載されているかどうかを示している。「ランキング順位」、「得点にあたるもの」、「病院名」はすべての情報源で記載されているが、朝日（全国対象のランキング）、日経新聞、扶桑では、「住所」や「電話番号」、「診察時間」などといった情報は掲載されておらず、それらはランキングに関する情報中心の情報源であることがわかる。ただし朝日、扶桑では、住所などの情報を別立てでまとめて掲載している。オリコン、宝島、日経BPでは、ランキングには直接関係のない付加的な情報も記載しており、名鑑に近い内容となっていると言える。

e. 検索手段

レファレンスブックにとっては、必要な情報にたどり着くまでの多様なアクセス方法が用意されていることが理想である。ある組織や機関についての情報を探すための名簿や名鑑と呼ばれるレファレンスブックにとっては、その範囲や最新性ととも、その形態は重要な評価ポイントであり⁵、このことは当然病院ランキング本にもあてはまる。形態とは、個々の記述の配列が明確か、一貫しているか、地名や、組織名、主題などの索引が十分用意されているということである。

表7には、病院ランキング本によって情報を検索する際に、可能性があると考えられる検索手段のパターンを4つ挙げ、それぞれの検索手段を行うことができるかどうかを調べた結果である。病院ランキング本では、病院名、疾患、診療科、病院のある地域などからの検索が考えられる。

「○」は十分に検索が可能なものであり、「△」はそのための検索方法が十分に用意されているとは言えないが、なにがしかの記載を頼りにすれば一応の検索が可能なもの、「×」はその方法では検索ができないことを示している。丸括弧内には、どのような手段で検索ができるかを記入した。例えば、朝日の「疾患から調べる」が「○（目次）」となっているのは、朝日は本体が疾患ごとの排列となっており、目次には本体で取り上げられている疾患と掲載ページが記載されているために、疾患からの検索が可能であることを意味している。

表7 検索手段

	朝日	オリコン	宝島	日経新聞	日経BP	扶桑
病院から調べる	×	○(索引)	×	○(索引)	×	×
疾患から調べる	○(目次)	△(目次)	○(目次)	×	○(目次)	×
診療科から調べる	△(目次)	○(目次)	△(目次)	×	×	×
地域から調べる	△(本文)	○(索引)	△(本文)	○(索引)	○(本文)	×

目次と本文以外に、索引を用意していたのは、オリコンと日経新聞の2件のみで、いずれも病院からの検索のために索引を作成していた。検索のための手段を充実させているオリコンは、調べるためのツールとしての利用を意識して作成されており、一方で検索のための手段があまり用意されていない扶桑や日経新聞、日経BPなどは、調べるためのツールというよりは眺めるための情報源となることを目指して作成されていると考えられる。

6. まとめ

本研究では、一般の人々が病院情報を探すための二次資料としてどのようなものが、どの程度出版されているのか、どのような傾向を持っているのかを量的に把握すること、そしてそのうち近年特に出版が目立っている「病院ランキング本」の評価を行うことを目的とし、過去20年に出版された病院情報を探すための二次資料の傾向の分析と、過去5年間に出版された病院ランキング本の内容の評価を行ってきた。結果を以下にまとめる。

- 1) 過去20年間に出版された病院情報を探すための二次資料は年を経るごとに増加しており、特に1990年代以降はその傾向が強い。中でも公的な機関による出版者よりも一般図書を出版する商業出版者による出版点数の占める割合が1990年代以降に高くなっている。
- 2) 病院ランキング本の出版者や編著者は医学、医療の専門家ではなく、調査対象とした病院や記載している病院情報を得たと考えられる参考文献が何であったかは示されていない。
- 3) いずれの病院ランキング本も、ランキング順位を決定するための調査手法や点数化のプロセスの詳細が十分には示されているとは言えず、調査の設計が適切かどうかの判断が難しい。
- 4) ランキングを決定するための調査内容は、医師や医療を中心としたものから、病院の施設

やアメニティを中心としたものまで多様ある。ランキングの判断材料も病院の自己評価から、患者の満足度、開業医の意見など様々である。

- 5) 調べるツールとしての利用が意図されているものと、調べるための手段をあまり用意しておらず通覧するための情報源として作成されているものがある。

以上のように、市民の情報ニーズに対応するように、病院情報を探すための情報源の出版点数は増加し、特にこの10年ほどで様々な情報源が出版されるようになってきている。この分野の図書はこれまで出版点数自体が少なく、特に一般人向けの情報源はごく限られていたことを考えると、出版点数が増加すること自体は喜ばしいことである。

しかし、今回用いた評価項目による病院ランキング本の評価結果に限って言うと、いずれも医療の専門家が製作していないことや、図書中の記載内容からランキングを決定する調査の設計が果たして妥当であったかどうかの判断が難しいことなど、内容の質に対する不安材料もみつけた。また調査手法や調査内容、ランキングの材料などは多様であり、それらを記載内容から十分に把握することは難しい。以上のようなことを理解した上で、これらの情報源を利用する必要があるだろう。

II. 質問回答事例データベース“教えて！goo”の分析による、一般人の健康分野における情報ニーズ

1. 目的

一般の人々がどのような医療・健康に関する情報を求めているかを探るために、インターネット上で提供されている質問回答データベースを材料としてそこに掲載されている質問の分析を行った。

質問

No.1694493

質問者:

05-10-05 20:56

回答1: 4名ときに回答ください

回答件数: 2件

この質問に対する回答は締め切られました

質問: 乳房エコーで異常というのは 癌の疑いでしょうか？

先日、初めて 乳腺検診を受けました。触診と乳房エコーの診断でした。「乳房エコーに異常」という結果が 届きました。X線検査は、30代ということで ありませんでした。生理後1週間~10日後に乳腺外来を受診するように言われています。既に動悸で生理が、遅れています。当初の検診が、生理後 1週間経過してましたので ベストの日であったと思います。祖母が 83歳で乳癌にかかりました。母のいとは、乳癌で他界しています。私は 出産経験なしの37歳です。精神的にダメージを受けてます。自覚症状は なかったのですが、結果を受けてから 右胸に違和感を感じています。精密検査を受ける予定ですが、エコーで異常というのは、覚悟すべきなのでしょうか？遺伝的な観点からも 気持ちが 沈んでいます。

最新から表示 | 回答順に表示

回答	
No.2	エコーで異常が指摘されただけでは、まだ乳腺症とか乳管拡張症、乳管内乳頭腫、線維腺腫など、良性疾患の確率の方が高いと思います。
回答者:	
05-10-05 22:11	鑑別のためにはマンモグラフィーや生検などの精密検査が必要なので、必ずお受け下さい。
返信: 回答 どんな人: 専門家 自信: あり 良回答(20pt)	たとえ不幸にして癌であっても、まだ自覚症状がないことを考えれば、早期のものであることは十分に期待できますし、治療法も日々進歩しています。「過度に恐れず、しかしあなごらすが病気と向き合う正しい方法です。」
参考になった数: 1件	
	参考URL:
回答に対するお礼	
<p>早々のお返事 ありがとうございます。 「乳房エコーに異常、乳腺外来を受診してください」という結果だけで 自分は 乳癌なのかと思い、動揺した毎日を送ってました。また 乳癌と決まったわけではいいですね。少し 気持ちが 穏やかになりました。次回の生理後 精密検査を受診します。</p>	

図7 “教えて！goo” 質問回答例

2. 方法

分析対象とした質問事例データベースとしては一般の人がインターネット上で容易に利用できる“教えて！goo”(http://oshiete.goo.ne.jp)を選択した。“教えて！goo”はこのサイトに参加した利用者が自分の質問をサイトに投稿すると、サイトの会員(約35万人)が回答するというシステムである。データベース上では質問者、回答者ともに匿名性を保つためにニックネームで表示され、回答者は自分の属性を、専門家(その分野の仕事をしている、研究をしている)、一般人、あるいは経験者(質問者と同じ経験をした人)で示している。なお、質問への回答率は99.2%である。質問と回答はデータベースとして蓄積され、このシステムの会員でなくとも誰でもこれを見ることが来る。現在このデータベースには約100万件の質問がカテゴリー別に蓄積され、それぞれの質問に1つ以上の回答が付けられている。データベースの検索は自然語で行われ、検索の対象は質問文のみならず回答部分

にまでわたっている(図7参照)。

このように、“教えて！goo”は質問事例が蓄積されており、その中には一般の人々の医療・健康に関係する幅広い質問、疑問が豊富に含まれていると考えて分析対象とした。

分析対象の質問としては一般の人々が現在関心を持っていると思われる、“乳がん”を選んだ。まず、本データベースのカテゴリーの中から、“美容・健康”の項の“健康”を指定した。そのセットについて、“乳がん”という語を含む質問例を検索した。検索された質問をその内容によって分類した。質問の内容分類項目は、病気への不安、乳がんとは、乳がん検診、検診後の対応、乳がんの治療法・術後の対応、病院・医師に関する情報、である。また質問について、本人が質問しているのか、家族からの質問か、あるいは友人によるものかを質問文の中から調査した。回答のプロセス、回答に使用したツール(ウェブサイト、図書など)、回答の内容などについても一部分分析した。

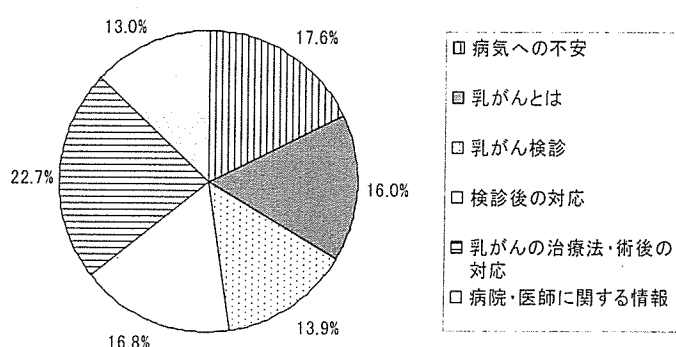


図8 質問回答事例データベース“教えて!goo”の質問内容分析 (n=238)

3. 結果

質問回答事例データベース，“教えて！goo”の健康カテゴリーについて，“乳がん”をキーワードとして検索したところ367件の質問回答事例が出力された。検索は2005年11月23日に実行され，検索された質問事例の質問日は2001年1月31日から2005年11月19日までのものであった。これらについて質問文および回答文の内容を検討したところ，129件は直接乳がんについての質問ではなく，回答文中に乳がんという語が含まれていた結果，検出されたものであることが判った。そのためこの129件を削除した238件についてその質問文の分類，質問者などの分析を行った。

質問の内容については，乳がんの治療法，治療後あるいは術後の治療についての質問が最

も多く54件(22.7%)であった。ついで乳がんという病気に対しての不安についての質問(胸がしこるのですが病気ではないかなど)が42件(17.6%)，乳がん検診後の対応についてが40件(16.8%)，漠然と乳がんとはどんな病気かという質問が38件(16.0%)と続き，乳がん検診そのものについての質問は33件(33件)，乳がん専門の病院，医師についての情報を求めるものが31件(13.0%)であった(図8)。

質問を寄せた人については，本人からの質問が圧倒的で177件(74.4%)であった。そのほか，医療質問の特徴であるかもしれないが，本人ではなく他の人からの質問もかなりの割合であった。すなわち家族(患者の，子供など)からの質問が47件(19.7%)，そして友人からのものが14件(5.9%)であった(図9)。

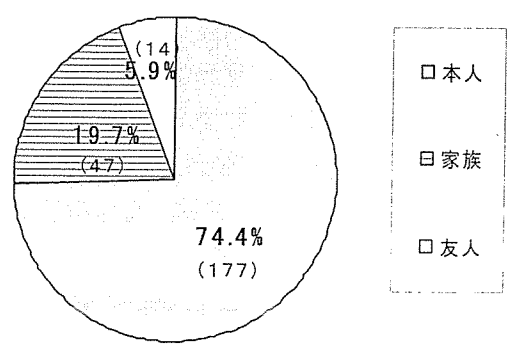


図9 質問者の属性

このシステムでは回答者は自分の属性を回答に記載することになっている。回答者の属性の分析にはここでの検索集合ではなく、乳がんについて網羅的にこの事例データベースを検索したものによった。すなわち、“乳がん”、“乳ガン”、“乳癌”を検索語として用いて検索された質問事例のうち、最新のもの500件について見ると、のべ1673人が回答し、そのうち一般の人が968人(57.9%)、経験者(乳がんの)が469人(28.0%)、専門家が236人(14.1%)であった。専門家とは、医師、看護師、その他の医療関係者である。一つの質問に対して、平均3.3件の回答が寄せられている。質問者は寄せられた回答が満足なものであればそこで回答を締め切ることとなっている。

インターネットによる質問回答システムの特徴として、回答には質問に関連するウェブサイトの示すことが薦められている。このため、分析対象の238件の46.6%、111件の回答で関連ウェブサイトが付与されていた。

4. 考察

一般の人々がどのような医療情報を必要としているかを探る一つの手段として、インターネット上に公開されている質問回答を集積した事例データベース“教えて！goo”の質問内容と質問者の分析を行った。また、回答については、回答者の属性の分析、回答プロセスとその内容についても考察した。

質問回答事例データベースへ寄せられた一般の人々の医療質問を乳がんについてみてみると、乳がんという病気はよく分からないのだが、怖いから不安で何か情報を知りたい、あるいは病気を疑うのはどのような症状なのか、不安だから検診を受けたいのだがよく分からない、といった質問は全体の半分、47.5%(113件)を占めている。人々は正確な病気についての情報、検診についての情報を望んでいることが判る。また、乳がんの検診を受けた人々(40人)、検診結果に不安を覚えて質問を出している。この中

には、検診結果の説明が不十分なことから情報要求、検診で乳がんの疑いありとされた人から次にとるべき対応についての質問が寄せられている。これらの質問は正確で質の高い、根拠に基づく医学情報の提供が求められていることを示している。そしてその提供の方法としては従来型の印刷形態の図書、パンフレットだけではなく、質の高いウェブサイト情報源も期待されている。

乳がんの専門病院や専門医師についての情報要求は全体の13%にすぎないが、これについては米国の消費者向け医療情報ポータルサイト MEDLINEplus(米国国立医学図書館NLM作成 <http://medlineplus.gov>)に掲載されているような地域別医療機関ディレクトリや専門分野別医師リストがウェブ上に提供されることが望まれている。

このシステムに質問を寄せているひとは、本人が全体の74%と殆どを占めている。質問内容項目の中の治療法、術後の治療などについての質問(54件)は多くは乳がん患者自身からあるいは患者の家族からのものである。自分が受けている現在の治療法に関する質問は非常に専門的なものがあり、これらに対しては専門家(医師)が丁寧に回答し、文献や医学文献データベースを紹介している例もある。またがんについての情報要求ではよくあることであろうが、補完・代替療法に関する質問もみられる。

代替医療の例として免疫療法についての質問への回答で、病気の経験者からの回答ではGoogleによって検索されたあまり質の高いとは思われないサイトからの情報を紹介しているのに対し、専門家(医師)は医学データベースMEDLINEで検索した結果、質問者が求めている特定の免疫療法についての学術文献が存在しなかったとして注意を与えている記述があった。このような医学的知見に関しては一般の人からの回答の中には、不正確なものも見られる。このようなことを防ぐにはNLMのサイトに紹介されているNIH(National Institutes of Health)の

Clinical Alert(臨床警告)情報や, MEDLINEplusのような質の高い情報源の紹介が必要になってくる。また, 乳がんの治療薬についての回答できちんと学術雑誌からの論文を引用してその効果を述べている例もあった。しかし, PubMedなどを紹介して, 文献データベースで得られるものは書誌データと抄録であるにもかかわらず, 検索すればあたかも特定の医学情報にたどり着くかのような不正確な回答もある。

5. まとめ

一般の人々が日常どのような医学・医療情報を必要としているかを質問回答事例データベース“教えて! goo”に寄せられた乳がんに関する質問について分析した。その結果, 約半数の質問が乳がんという病気についての知識の不足から起こったものであった。また検診を受けた人が検診後に起こる不安からの質問も多数認められた。乳がん患者からの質問は特定の治療法, 治療薬, 代替療法, 健康食品などについての具体的な情報を必要とするものであった。質問者については本人からが圧倒的であった。

インターネットによるシステムであることから, 回答もウェブサイトの紹介が多いが, そこでは質の異なるサイトが混在し質問者にとってはそのサイトの質の判断が困難なものと考えられる。これを解決するためには MEDLINEplusのような評価済みサイトのみを掲載した消費者健康情報ポータルサイトが必要である。MEDLINEplusに含まれる, 病気についてのわかりやすい音声とイラストそして説明文が入ったチュートリアル・システムも参考になる。また, 検索エンジンによって数多くのサイトが検索されたり, 種々の関連すると思われるウェブサイトが紹介されたときに, 消費者が自分で情報源を評価できるためのガイドラインも必要となろう。

Ⅲ. 公共図書館における健康情報サービスの 実地調査

本研究班では, 2004年度に全国の市町村立

図書館 133 館に対して健康情報の提供に関する質問紙調査を実施した。その結果, いくつかの公共図書館では, 医学, 医療分野の情報提供に対して特色ある取り組みを行っていることがうかがえた。そこで, 2005年度はそのような図書館のうち, 富山県立図書館と市川市立図書館に対して訪問調査を行い, 医学や医療分野の情報提供の実態について聞き取りを行った。以下にその結果を報告する。

1. 富山県立図書館訪問(2006年2月9日)

富山県は, 人口約110万人, 現在10市4町1村の自治体からなる地域である。古くから医薬の伝統を持ち, また重工業や化学工業を中心とする産業が盛んである。特に製薬業は, 300年以上の歴史をさかのぼることができる。17世紀末に, 富山藩主の前田正甫(まさとし)が, 全国各地への薬の行商を藩の事業として始めて成功したことをきっかけに, 製薬業や全国各地への売薬が盛んになった。現在でも約4,700人の配置員が登録され, 先用後利による売薬が行われている。富山はこのような「富山の売薬」の伝統を受け継ぐ地域であり, 現在も製薬会社や研究所が多いことで知られている。

重工業や化学工業の企業にとっては, 最新の研究成果や特許に関する文献の入手が必須である。富山県立図書館は, 地域で求められるそれらの文献入手に対するニーズに応えるべく, 様々な取り組みを行ってきた。1958年には, 県立図書館に PB レポート(米国政府関係機関等による研究開発レポート)の地区センター, 「北陸地区 PB レポートセンター」が設置された。PB レポートには, 当時国内の企業が必要としていた米国の先端技術に関する情報が含まれていたため, それらに対するニーズは高かった。

同時に, PB レポートのみでなく, 地元産業に利用される産業資料を整備し, 「工業所有権閲覧所」として所蔵する特許公報類の利用を促すために, 「産業資料室」が開放された。この産業資料室の効率的な利用と利用者からの協力を

目的として、1959年には、化学、金属、機械工業の企業が中心となる30機関を会員とする「科学技術文献利用振興会」が発足した⁶。

科学技術文献利用振興会運営の予算は会員の会費によってまかなわれたが、事務局は県立図書館が引き受け、実際の運営も県立図書館の職員に一任されていた。会の活動は、他機関への文献複写の依頼、県内で所蔵する科学技術関係の雑誌目録の作成、会員への研修活動、機関誌の刊行など多岐にわたった。中でも他機関への文献複写の依頼は、科学技術文献を所蔵している機関が少ないという地域の事情のため、よく利用されたサービスであった。しかしPBレポートや特許資料がウェブを通じて提供されるようになり、産業資料室が廃止されたことがきっかけとなり、科学技術文献利用振興会は解散され現在に至っている。

企業の研究者はウェブを利用すればある程度の文献調査や所蔵館の確認、必要な文献の入手が可能になった。しかし以前に会員として図書館を利用していた人々には、県立図書館を通じて他機関に複写依頼をし、文献を入手するという利用が定着していた。そのため、所属する企業やウェブを通じても入手できない文献があった場合(あるいは入手までにかかる日数と料金を天秤にかけて県立図書館を利用する方が

都合のよい場合)は、現在でも県立図書館での複写依頼を利用しているという。

県立図書館における他機関への文献複写は、平成14年で1,264件、15年で1,167件、16年で980件であった。正確なデータはないものの、そのうち7割から8割程度が企業や研究所の研究者によるものであろうとのことであった。このような利用に応えるために、富山県立図書館では、国内の医学分野のデータベースである「医中誌Webサービス」を契約している。相互貸借の依頼があった文献の書誌情報を確認するために、「医中誌Webサービス」や、「PubMed」を利用している。

図書館内には、利用者がインターネットに自由にアクセスできるコンピュータ端末が10台備えられた「情報プラザ」がある。これらの端末では、図書館の所蔵する貴重書のデータベースである「古絵図・貴重書ギャラリー」というデータベース(インターネットを通じて公開)や、図書館の契約する各種データベース(館内のみ利用)も利用できるようになっている。これらの端末から、「医中誌Webサービス」も無料で利用できる。企業の研究者の他、看護学校の学生等にも利用されているようである。参考までに、「富山県立図書館 電子情報利用規則」の1部を挙げておく(表8)。

表8 富山県立図書館電子情報利用規則

1. 利用の目的

図書資料の補完として、調査研究に役立つ電子情報を利用できる。

2. 利用の範囲

- ・ 図書館が所蔵するCD-ROM, DVD等の閲覧
- ・ 図書館が選定した情報サイト, その他, 調査研究に必要なサイトの閲覧
- ・ 図書館が契約しているデータベースサイトの閲覧

(略)

4. 利用の手続き

開館時間内とする。

1回の利用時間は、原則として1時間とする。ただし2回まで延長できる。(最長3時間までとする)

5. 利用料

無料とするが、画面のプリントアウト(インターネットはあらかじめ定められたサイトのみは可能)は有料(白黒1枚10円, カラー1枚80円)となる。

(略)



写真1：書庫の薬学関係雑誌のバックナンバー

また、医学や薬学に関する文献のニーズが高いために、富山県立図書館には、この分野の雑誌や図書も多数所蔵されている。一般の公共図書館では所蔵しないような専門書や医学、薬学分野の専門雑誌のバックナンバーも保管され、現在でも利用されている(写真1)。

これらの資料の選書の拠り所となる「富山県立図書館資料収集方針細則」では、NDC(日本十進分類法)のすべての分野について、詳細で具体的な選書基準が示されている。医学、薬学分野である「490」を含む4類の選書基準を挙げておく(表9)。

以上のように、富山県立図書館による医学や薬学分野の情報提供は、地域の歴史の中で醸成された利用者のニーズに応える図書館の姿勢とその継続の上に実現しているものであることがわかった。蓄積された貴重な知識やノウハウ、資料を生かすことで、現在は中心的なターゲットにはなっていない一般の利用者が、健康情報を入手しやすい環境を実現できる可能性があるのではないだろうか。

2. 市川市立図書館訪問(2006年3月17日)

市川市は、千葉県の西部に位置する人口約46万人の都市である。市川市立図書館は、中央図書館と地域館4館からなり、中央図書館はメディアパーク市川という、中央こども館、映像

文化センター、文学プラザなどからなる複合施設の1階に設置されている。平成6年に開館したという建物は美しく、入り口を入ると開放感のあるフロアが広がる落ち着いた雰囲気のある図書館である。図書約58万冊と雑誌約350タイトルを所蔵しており、1日の貸出冊数は6,000冊(多い日では15,000冊)、年間の貸出冊数は180万点に達する。活発な図書館活動を行っていることで全国的に知られている図書館である。

市川市は、2004年に「WHO憲章の精神を尊重した『健康都市いちかわ』宣言」を行い、世界保健機関(WHO)の西太平洋地域事務局が発表した「健康都市プロジェクト発展のための地域ガイドライン」に基づいて「市川市健康都市プログラム」を立ち上げた。WHOの「健康都市プロジェクト」とは、都市に住む人々の健康を維持するためには、その都市の諸条件を整える必要があるという考えのもと、保健や医療を超えた社会の仕組みを構築しようという計画である。プロジェクトに参加する都市は、2,000から3,000にも上り、参加している都市では、国を超えた相互交流や情報交換、都市におけるプロジェクトの実施、都市間のネットワークの構築などを行っているという⁷⁾。

表9「富山県立図書館資料収集方針細則」

400

- (1) 各分野の入門・概説書を収集する。専門・研究書は選択して収集する。
- (2) 利用者の範囲が極めて限られる専門書は収集しない。
- (3) 専門書の翻訳書は厳選する。
- (4) 科学史上の古典を収集する。

401 科学技術文明論，情報化社会論，産業情報を収集する。

402

- (1) 各国の科学技術史を収集する。日本については時代史に及ぶ。
- (2) 各分野の科学技術史を広く収集する。

440 個々の天体，星座について収集する。

450

- (1) 雪氷寒冷に関する図書は広く収集する。
- (2) 自然保護は広く収集する。
- (3) 地震，地沁り等を収集する。
- (4) 地質図は近県のもの，地質学上特色のある地域のものを収集する。

460～480

- (1) 個々の動植物の研究書は広く収集する。
- (2) 天然記念物調査報告は，国及び各県に及んで収集する。

490

- (1) 医学・薬学の専門書は，原則として収集しない。
- (2) 病気の解説書，家庭医学は選択して収集する。
- (3) 医療問題，衛生学，栄養学は広く収集する。
- (4) 製薬産業は収集する。
- (5) 健康法は厳選する。
- (6) 医師名簿は年度をおいて収集する。
- (7) 医と倫理，死については広く収集する。

市川市では、既存の事業のうち人々の健康を直接、間接に支援するような事業を体系化して整理し、その中でも「食による健康づくり」、「楽しく歩ける道づくり」、「ITを活用した健康支援」など10の重点目標を定めて推進プランとしている。プログラムが立ち上がってからは、図書館において健康情報を提供する活動は、この体系の中の「文化」の中に位置づけられるようになった(図10参照)⁸。

市川市立図書館では、もともと自館製ツールともいえる各種のデータベースを多数作成し、ウェブ上で提供してきた。これらのデータベースの中で、健康情報を提供するサービスとして、「医学関連資料件名検索」⁹という検索システムが提供されている。これは、市川市立図書館で所蔵している医学分野の資料を、病名や疾患部など主題から検索し、OPACの検索結果を表示できるというシステムである。さらに同じシステ